

構文理論による連辞 *be* の項構造の試案

田林 洋一

A tentative proposal for the argument structure of the copula *be* in Construction Grammar

Tabayashi, Yoichi

This paper examines the argument structure of copula *be* by applying Goldberg's Construction Grammar (1995). Firstly I make a survey of the relation between Argument Structures and Case. Secondly I propose that the relation between arguments governed by the copula and the thematic role can not be explained by Government - Binding Theory (here after GB Theory) and event structures (Langacker, 1987). Finally I try to explain the argument structure of the copula by using Construction Grammar.

Though phrases with the copula violate the Case Theory and Theta-Criterion, they are totally grammatical and acceptable. Thus, we must conclude that the copula is one of the specimens which may falsify GB Theory. Langacker's event structures can not deal with the copula from the perspective of argument structures as well.

Instead of GB Theory and event structures, I suggest that Goldberg's Construction Grammar will explain the argument structure of the copula. I hypothesize that Construction knowledge may provide an argument structure for the phrases with the copula. In this paper I treat only the argument structure of the copula and do not mention the thematic role concerned with these argument structures.

Furthermore, the identification of the thematic role's relation to the argument structure of the copula requires further and careful consideration. My purpose in this paper is only to clarify the form of argument structures, not to

—
—
—

clarify the relation between thematic roles and argument structures. However this proposal will help to clarify the formulation of the thematic role of the copula.

—
—
—

0. 序

本稿では項構造と格の関係を概観した後、連辞 *be* の支配する項構造が、Chomsky の生成文法、特に統率束縛理論（以下、GB 理論）及び Langacker (1987) らが提唱する事象構造だけでは扱えないことを説明する。更に、連辞 *be* を事象構造から発展した構文理論によって解決することを目的とする。

本稿では便宜上、Langacker (1987) に代表される諸理論を事象構造、Chomsky (1981) に代表される諸理論を GB 理論と呼ぶ。構文理論で述べる項構造は GB 理論のそれよりも高次のものであることを主張し、構文理論に修正を加え、項と意味役割の関係をより一般的に説明することを目的とする。

0.1 項構造と格

項構造と格という術語は頻繁に登場するが、その決定的な定義を議論した文献は少ない。ほとんどの議論では「項構造 (Argument-structure) ¹ は意味役割と密接な関係を持つもの」という漠然とした前提を基盤としている²。Grimshaw (1990) は項を「述語の意味を成立させるのに統語的に必要な意味役割」と言及するが、定義としては明確ではない。Chomsky (1981) は項を「主語や目的語といった文法関係が与えられる位置 (A-position)」と定義しているが、文法関係の定義として「文法関係 (Grammatical Relations) を与える位置は意味役割を与える位置、即ち項」と表現し、文法関係と項の関係がトートロジーになっている。大堀 (2002) でも、項は「述語にとって必須の参加者」、文法関係を「文の構造レベルで同じ扱いを受ける参加者のカテゴリー」という曖昧な定義に終始している。

本稿では項は意味役割を担う場として扱い、操作的な定義は行わない。暫定的に、項は動詞によって与えられ、動詞毎に与えられる項の数の情報が動詞の中にあると仮定する³。

格は伝統的な文法格と抽象格に分けられる。文法格は、英語の前置詞は目的格をとり、ロシア語では造格、前置格、生格などをとりうるといった個別言語内での名詞句の語形変化にかかわる議論であり⁴、一方 GB 理論や Fillmore (1968) の格文法では抽象格を問題にする。

文法格において一つの格形がただ一つの意味を有すると前提する必要はないし、また、格的な意味を表す限りは、個別言語によって格語尾や前置詞、後置詞といっ

た形で表されるが、その形態的差異は本質的な違いではない。

抽象格は項と密接な関係を持っている。項は動詞から情報を与えられるため、義務的に生じる前置詞句と選択的な前置詞句を区別することができる。一方、文法格は前置詞句、動詞、動詞句等から別個に付与されるもので、義務的な格と選択的な格を同列に扱わざるを得ない。本稿では、格は抽象格を指す。

上記の議論のまとめとして、項と格の関係は極めて密接だがその定義は曖昧で、項は動詞がもたらす必須の命題的意味、格は動詞からのみならず、前置詞句などからも付与されると結論する。

1. 本論

本稿では、Langacker (1987)、Goldberg (1995) 及び Chomsky (1981) で議論された諸理論につき、項構造に的を絞って概観する。それぞれ優れた発展研究が無数にあるが⁵、それらを包括して前節の呼称を用いる。

1.1 生成文法における項構造とその問題点

時制とモダリティを除いた命題部分⁶の意味を規定する方法として、生成文法では動作主や主題といった名詞句の意味役割を設定する方法を取ってきた。これは Fillmore (1968) の格文法を土台としたもので、GB 理論の中核を成すと同時に、語彙機能文法 (Bresnan & Zaenen, 1990) などにも引き継がれてきた。GB 理論では、意味役割を与えられる位置を項とし、項構造はある命題の意味を規定するのに必要不可欠な項の集合体 (Grimshaw, 1990) と規定する (0.1 参照) ⁷。しかし、項構造の定義自体が曖昧で、かつ語用論的文脈を無視したいわゆる「理想的な言語モデル」を前提としているため、諸々の破綻例がある。

(1) She put the vase on the table.

GB 理論によれば、put は項を三つ与える動詞で、動作主、主題、場所の三つの意味役割をそれぞれ担う。そして、一つの項に必ず一つの意味役割が付与される原則を θ 理論と呼び、GB 理論の骨格を成している⁸。(1) の例文では、She が動作主を、vase が主題を、table が場所の意味役割をそれぞれ担い、動詞 put の命題的意味を

表すのに不可欠な要素と定義される。だが、(2) では、この原則が崩れる。

(2) A: What did she put on the table?

B: She put the vase.

Bの発話は on the table が既知情報とされるため、発話されないことが多い。従って、本来ならば三項を伴って初めて具現化されるはずの動詞 put が、二項ないしは一項を伴うだけで表出可能になる。

これを語用論的に解釈して、(2) の B における発話は on the table を潜在的にもちうるから具現化される必要はないとする主張は反論にならない。GB 理論では語用論的に具現化されない項と意味論的に具現化されない（即ち、命題の意味に必須でない）項とを区別していないからである。

更に以下の例文を検討する。

(3) *It seems John to be sad.

(3) の非文法性を GB 理論では以下のように説明する。即ち、格理論により音形を持つ名詞句は必ず格を付与されなければならない。しかし動詞 seem は自動詞であるため格を付与する能力が主語の位置にしかなく、目的語の位置にある John はどこからも格を受け取ることができない。John は音形を持つ名詞句でありながら格が付与されないのが非文である。以上を踏まえた上で以下の例文を検討する。

(4) a. John is sad.

b. John is a student.

(4a) は動詞 is が格を主語の位置に一つ付与するので、適格である。しかし、(4b) では音形を持つ名詞句 student に格が付与されないにもかかわらず適格である。更に GB 理論では、連辞が同一性を表す記号（次節参照）と仮定するならば、そもそも (4b) において出現した二つの名詞句 John と student の両方に格が付与されないと結論付けられてしまう。この矛盾を避ける唯一の方法は動詞 be と連辞

be は同音異義語であると規定することだが、それでは問題の解決にはならない。

以上、GB 理論では連辞を表す際に格付与において矛盾が生じること、連辞を単なる顕在的な名詞句同士の結びつきの指標とすることはできないことを見た。

1.2 場所理論及び Benveniste (1966) による連辞 be とその問題点

池上 (1975, 1981) では、連辞 be を場所理論によって説明している。即ち、(4b) は以下のような意味構造を持つとしている。

(5) John is in the state of being a student.

池上はあくまで意味分析に視野を絞ったもので、(4b) において student に格を付与する要素を説明していない。

Benveniste (1966) では、古代セム語や印欧語等が連辞の be を持たないとして名詞文及び have との比較からこの点を論じている。現代ロシア語も連辞 be は必須項ではない。Benveniste は、連辞 be は同一性を表すので如何なる時制やアスペクトの影響も受けなため、平叙の表現における論理関係に動詞としての表現と語彙としての表現の機能を所持する連辞 be が何故出現するのかを問うことが重要であると指摘している。

ロシア語では、連辞表現の発話において、二つの名詞句の間にある休止が連辞の機能を果たす。連辞 be を伴う言語では、ロシア語の顕在化されていない連辞として機能する休止が、一つの顕在的記号である連辞 be によって具現化されたと見ることもできよう。即ち、〈存在する〉という意味役割を持つ be と、連辞としての be には本質的な関係はない。アラム語の以下の例文を検討する。

(6) 'elāhkōn hū 'elāh 'elāhīn.

NomSg-Pos 3PrsSgPron NomSg NomPl

汝の神は、神々の中の神である。

Benveniste (1966)

ここでは三人称代名詞である hū が連辞の機能として働き、更に代名詞である連辞

と主語の間には数の一致が見られる。従って、Benveniste は当初は名詞文として表現されていた同一性の意味が、何らかの顕在的記号によってその関係を示さねばならず、三人称代名詞や存在を表す動詞が恣意的に選ばれたと主張する。しかし、Benveniste の「連辞は意味を持たない」とする主張には (7) のような反例がある。

(7) Krasotá est' informacija

美こそ情報である

ロシア語では連辞ゼロが無標だが、強調を表す際に連辞 *est'* が出現する。従って、ロシア語の連辞は強調の意味を担うと考えられうる。このように連辞に意味が存在する言語もありうるため、連辞が純粋な顕在的記号であると断言できない。

1.3 事象構造における項構造とその問題点

事象構造 (event structure) は、人間が認知し、脳の神経組織に痕跡が残されうる認知上の事象を連続的なプロセスとして説明する。事象の問題はかつて言語学ではなく哲学の領域であった。動詞の語彙的アスペクトの四分類を提示した Vendler (1967) も哲学者である⁹。哲学が事象において動詞の語彙的アスペクトに注目したのに対し、言語学は動詞の意味や時制によって変化する副詞句の容認性に注目した。事象という概念において重要な役割を果たしているのが語彙意味論の分析である。

語彙意味論では、自然言語の基本単位である文は動詞あるいは述語を中核として形成され¹⁰、動詞の中核的な意味は何らかの事象を表すことにある、と考えられる。そして事象は幾つかの基本的な要素に分解され、一定の構造を持っていると想定される。語彙意味論の研究では、動詞の意味を、表面には現れない抽象的かつ有限の意味要素に分解して分析することを目的とする¹¹。この考え方は生成意味論などから発展し、認知言語学、生成語彙理論等に継承されている¹²。

こうした事象構造は Croft (1991) の使役連鎖 (causal chain) や Langacker (1991) の行為連鎖 (action chain) でも重視されているが、術語が異なるだけで本質的に大差はない。要は事象を構成する一つの要素として、参加者間の相互関係を表すモデルである。最も単純な事象構造は状態であり、(8) の例文は (9) のように表される。

(8) Water is cold.

(9) e: state

P(y)

P = cold y = water

(9) は関数 P における y の状態を表している。大堀 (2002) は項とその因果関係をはっきりさせるために、Langacker (1987) や Croft (1991) にならい、ビリヤード・モデルを使って (9) のように表示している。

(9') 水が冷たい。

水 —

● → ●

STATE; COLD

大堀 (2002)

連鎖上の黒丸で示した点は事象の参加者を表し、矢印は参加者間の影響をそれぞれ表す。(9') では丸が二つ表示されているが、実際の参加者は「水」のみであり、意味役割 **THEME** (主題) が与えられる。

(10) は、他動詞のビリヤード・モデルである。

(10) 管理人がドアを開けた。

管理人 — — ドア — —

● → ● → ● → ● → ● → ●

VOL ACT CAUSE MOVE STATE; OPEN

大堀 (2002)

参加者の意味役割は因果連鎖上で対応するリンクによって決定される。(10) は項が「管理人」と「ドア」、意味役割はそれぞれ、「管理人」は意志を持って行うリンク **VOL** の存在により動作主、「ドア」は **MOVE-STATE** リンクに基づいて主題と決定される。

ビリヤード・モデルの利点は項と意味役割の因果連鎖が視覚的に表現できること、影響を与えている事象がどのような参与者を含み、どのような種類の関係から成立しているかを表示できることである。特に、文や動詞等の事象に関わる意味分析に有効である。その点では GB 理論に勝るが、統語論との関係が綿密でなく、意味役割に格を与える指標が明確でない。従って、GB 理論と同様、連辞 *be* を分析する手立てにはならない。以下の例文を検討する。

(11) John is a student. (= 4b)

John student
● → ●
STATE; STUDENT

(11) では (9) と同じ因果連鎖を持つが、*student* が持ちうる格及び意味役割がどこから付与されるのか明確でない。次節でその解決策を Goldberg (1995) から模索する。

1.4 構文理論における項構造

構文理論 (Construction Grammar) とは、ある特定の意味と形式からなる構文の存在を容認する考え方で、Lakoff (1987) や Fillmore (1982) のフレーム意味論 (Frame Semantics) で既にその存在は指摘されている。それをより体系化したのが Goldberg (1995) である。

構文理論における主張はおおまかに言って、(1) 構文は特定の意味と形式からなり言語の基本的単位をなす、(2) 格文法によって説明される文法構造だけでなく、全ての構造をも包括する、(3) 語彙と統語の区別が通説とは違い明確でない¹³、(4) 語用論的要因を考慮に入れる必要がある、と説明されよう。Goldberg の大きな功績の一つは、以上の主張に加え心理学的要因も積極的に取り入れたことで、意味役割と項の不一致を解決したことにある。意味役割と項の不一致の現象は二重目的語構文などが代表的であるが、本稿では使役移動構文 (cause-motion construction) に的を絞って概観する。使役移動構文とは、以下のような文である。

(12) Pat sneezed the foam off the cappuccino.

大堀 (2002)

(12) では動作主の意味役割を持つ Pat が主題の意味役割を持つ foam に使役的に働きかけ、前置詞句で示された経路を辿る運動を引き起こす。構文理論では、これらは動詞からではなく構文から項を与えられ、意味役割を担うとする立場を取る。つまり、(12) の意味と統語構造は動詞 sneeze という語彙項目によってもたらされたものではなく、使役移動構文という構文によってもたらされたものである。この構文も他の構文同様生産性が高く、単なる foam の具体的移動から抽象的移動にまでメタファー的に拡張できる (e.g. John allowed Mary out of the room)。

フレーム意味論は、動詞 sneeze が表す行為が「カプチーノから泡を飛ばす」という運動を使役的に引き起こしうるという知識を持っていると説明する。生成語彙論では、語彙項目の段階で既に動詞 sneeze には使役的な移動を引き起こしうるという情報があると仮定される。しかし、生成語彙論では動詞に付与される情報があまりに多すぎることに、フレーム意味論では語用論的及び心理的な要素が過大評価されていることから、構文理論における説明が最も妥当であると思われる。

(12) における格付与は、統語論のレベルでは cappuccino は前置詞 off から具格を、Pat は動詞 sneeze から主格を付与されるが、foam は構文知識から目的格を付与されているとしか説明できない。生成語彙論では動詞 sneeze の情報が一定でないため格付与が限定されない。

(13) *Pat sneezed the foam.

大堀 (2002)

(13) の非文法性は、動詞 sneeze は foam に格を付与しないと説明できるが、この説明を推し進めると生成語彙論では (12) の文法性を説明できない。場合ごとに理想的な認知モデルを構築するフレーム意味論では、全てを語用論的解釈に推し進めてしまうために具体的な格の供出先を特定できない。従って、(12) における foam の統語的抽象格は、構文知識から供出されると考えられる。

1.5 連辞 be における構文理論の修正

以下では連辞 be を構文理論によって説明する。連辞 be の構文知識のプロトタイプは、基底構造を NP is AP とし、Goldberg (1995) の標識に倣って以下のように示される。

(14) Composite Structure: Copula *be*

Sem	STATE <+identify>	< theme	attribute>
R: means	PRED		
Syn	V	SUBJ	COMP

上段は意味を、下段は統語を、中段は意味役割と項を融合するスペースを表す¹⁴。PRED は未定の動詞を表す。統語構造は主語と補語から形成され、意味構造はそれぞれ THEME (主題) と ATTRIBUTE (属性) と対応する¹⁵。この提案は、池上 (1981) が NP is PP を基盤とする場所理論を用いて連辞を説明する方法と対立する。

意味構造において STATE に IDENTIFY が付随するが、これは動詞の情報ではなく構文の知識から出現した意味構造である。述語分解において BECOME や ACT といった基本的な意味成分に還元されうるのを前提とした上で¹⁶、ここでは構文知識によって生じる意味 STATE<+identify>を仮定する。場所理論では連辞 be における意味を STATE と同一視しているが、Benveniste (1966) らの主張からは退けられること、また、状態を表す表現と同一性を表す表現は、幾多の個別言語が同じ動詞を選択しているが、意味構造は異なると考えられる点で、本稿の趣旨と反する。

(14) のプロトタイプ構文から、(4b) における項と意味役割の関係を表すと、以下の通りである。

(15) Composite Structure: Copula *be*:

Sem	STATE < <u>+identify</u> >	< theme	<u>attribute</u> >
R: means	BE	<u>IDENTIFIED</u>	
Syn	V	SUBJ	COMP
	is	John	<u>student</u>

下線で表した部分は構文知識から付与された要素である。まず、意味構造 STATE に付随する<+identify>は、連辞 be の構文知識と仮定する。構文知識連辞 be は、student の位置に項を付与し、意味役割 THEME (主題) を与える。同定されるものは John であるが、これはもともとの意味 STATE<+identify>が既に構文知識に根ざしているため、その対応関係もまた構文知識に依る¹⁷。

Goldberg (1995) では、個々の動詞が項に対して課す意味指定を参加者役割 (participant role)、構文知識が名詞句に対して課す意味指定を項役割 (argument role) と呼んで区別している。参加者役割は個々の動詞毎の意味の違いに対応する細かい意味情報を持つが、項役割は構文知識に根ざしているため、より一般的であり細かい意味情報は指定されていない。従って、下線で示した名詞句 (student) は構文知識連辞beから項を得ているので項役割、下線で示されていない名詞句 (John) は動詞beから項を得ているので参加者役割と規定できる。

Goldberg (1995) の参与者に関する統語論的試験方法は、動詞を動名詞にして No ~ing occurred という文を作った際に、どのような参与者が関与したかチェックするものである。(4b) をこのチェックに当てはめると、(16) になる。

(16) No John's being student occurred.

動詞の動名詞化における格付与の現象は様々な研究がなされているが (例えば Haegeman, 1994)、本稿で問題にするのは参与者の規定である。(17) から、参与者は IDENTIFIED という項役割が規定されよう。

前述したように (0.1 参照) 項構造と格の関係は極めて曖昧であるが、John は主格を、student は構文知識によって意味 IDENTIFY を与えられた動詞beから格を受け取るため、対格と規定できる¹⁸。

本稿では連辞を単なる動詞の多義と見るのではなく、構文から生じた意味として分析した。しかし、松本 (2002) や Quirk (1995) らが指摘するように、動詞の意味情報を重視する見方を全面的に否定するわけではない。

2. 結論

本稿では連辞beの項と意味役割がGB理論及び事象構造だけでは説明できないことを説明した上で、事象構造から発展した構文理論によって解決可能であることを見た。今後の課題として、(1) 連辞 be が付与する意味役割は何か、(2) その際与えられる格は何か、(3) 語彙と統語のどちらから構文知識は発生するか、といった点を明確にする必要がある。本稿の目的は項と意味役割の対応関係を明らかにすることであり、提示した意味役割及び格はあくまで暫定的なものである。

更なる可能性として、極性を与える構文知識の存在も考慮に入れられよう。注意すべきことは、構文理論を設定する必要があることを認めた上で、過剰に構文知識に逃げ込むのではなく、事象構造で説明されえない言語現象を検討する際に構文知識の存在を疑うように慎重に扱うことである。

参考文献

- Anderson, J (1971) *The Grammar of Case: Toward a Localist Theory*. Cambridge.
- 安藤貞雄編 (1993) 『生成文法用語辞典』大修館書店。
- Benveniste, E. (1966) *Bulletin de la Société de Linguistique de Paris: in Problèmes de linguistique générale*. Gallimard.
- Bresnan, J & Zaenen, A (1990) *Deep Unaccusativity in LFG*. Stanford University.
- Chomsky, N (1981) *Lectures on Government and Binding*, Mouton De Gruyter.
- _____ (1986) *Knowledge of Language: Its Nature, Origin and Use*. Praeger.
- Cook, V (1988) *Chomsky's Universal Grammar*. Blackwell.
- Croft, W (1991) *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. Chicago Press.
- Dubois, J et al (1973) *Dictionnaire de linguistique*. Librairie Larousse.
- Fillmore, C (1968) *The Case for Case*. In Bach, E and R. T. Harms (eds), *Universals in Linguistic Theory*. Holt.
- _____ (1982) *Frame Semantics*. Hanshin.

- Goldberg, A (1995) *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. University of Chicago Press.
- Grimshaw, J (1990) *Argument Structure*. MIT Press.
- Haegeman, L (1994) *Introduction to Government and Binding Theory*. Blackwell.
- Holzweissig, F (1877) *Wahrheit und Irrtum der Localistischen Casustheorie*. Leipzig.
- 池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館書店。
- _____ (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店。
- Jackendoff, R (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MIT Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版。
- 河上誓作 (1996) 『認知言語学の基礎』研究社出版。
- 金田一春彦 (1950) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房。
- Lakoff, G (1987) *Women, Fire and Dangerous Things*. University of Chicago Press.
- Langacker, R (1987) *Foundations of Cognitive Grammar 1: Theoretical Prerequisites*, Stanford University Press.
- _____ (1991) *Foundations of Cognitive Grammar 2: Descriptive Application*, Stanford University Press.
- 松本曜 (2002) 「使役移動構文における意味的制約」『認知言語学 I : 事象構造』シリーズ言語科学 2. 東京大学出版会。
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』大修館書店。
- 大堀壽夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会。
- Pustejovsky, J (1995) *The generative lexicon*. MIT Press.
- Quirk et, al (1995) *Comprehensive Grammar of English*. Longman.
- Sells, P (1986) *Lectures on Contemporary Syntactic Theories: An Introduction to Government-Binding Theory, Generalized Phrase Structure Grammar, and Lexical Functio*, Stanford University Center for the Study.
- Shimoda, Y (2000) *La Vinculación entre la Oración Principal y Subordinada en la Cláusula Sustantiva en Español. Sofia Linguistica 51*. Sophia University.

- Stowell, T (1981) *Origins of Phrase Structure*. Ph.D. dissertation, MIT.
- Talmy, L (2000) *Toward a Cognitive Semantics*. MIT Press.
- Taylor, J (1989) *Linguistic Categorization-Prototypes in Linguistic Theory*. Oxford University Press.
- 辻幸夫 (2002) 『認知言語学キーワード事典』 研究社出版。
- Ungerer, F & Schmid, H (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics*. Longman.
- Vendler, Z (1967) *Linguistics in Philosophy*. Cornell University Press.

-
- 1 Grimshaw (1990) 及び Haegeman (1994) を参照。
- 2 Stowell (1981) は項構造を θ -grid と呼んでいる。
- 3 影山 (1996) は、外項は動作主、内項は主題などの意味役割を与えるとしている。
- 4 格の具現は個別言語によって異なり、日本語や朝鮮語では後置詞、英語や中国語では語順、フィンランド語などでは屈折で表す。
- 5 Langacker (1987) については、Talmy (2000) 他を参照。Goldberg (1995) については影山 (1996) 他を参照。Chomsky (1981) については、Sells (1986)、Haegeman (1994)、Cook (1988) 他を参照。
- 6 文を命題とモダリティに分割する方法は中右 (1994) を参照。
- 7 Stowell (1981) では θ -grid と呼んでいるが、本質は同じである。
- 8 Shimoda (2000) では、 θ 理論を否定し、一項につき複数の意味役割を与える可能性を示唆している。
- 9 金田一 (1950) は、Vendler に先んじて日本語動詞を四分類している。
- 10 動詞が命題の中核とする議論は Anderson (1971) を参照。
- 11 影山 (1996) を参照。
- 12 Pustejovsky (1995) による生成語彙理論においても語彙項目に記載すべき情報として項構造と並んで事象構造を挙げている。
- 13 影山 (1996) はこの区別立てが重要であると論じている。
- 14 Goldberg (1995) 一部改。
- 15 主語の意味役割については諸々の議論があるが、本稿では取り扱わない。重要なのは与えられる意味役割と項との対応関係であり、本稿の連辞 *be* における主語の意味役割は、暫定的に Quirk et, al (2002) を採用した。
- 16 述語分解については Jackendoff (1990) の概念意味論に準拠する。
- 17 不定冠詞のゼロ化 (e.g. Bill is ϕ captain of our team) も説明されうるが、本稿では扱わない。
- 18 本稿では Holzweissig (1877) に倣って動詞から規定された格を対格とした。